

# 石狩支部

## 1. 石狩支部の歩み

保健体育部会は石狩管内教育研究会の専門部会のひとつとして発足し、研究活動を進めてきた。

母体となる石教研活動については以下のような経緯がある。

現在の石教研活動を生み出した重要な要素として、昭和30年から石教研発足の前年まで取り組まれた「共同研究」時代の成果が上げられる。それは、管内の全教師が一丸となって「生活の正しいあり方を見ぬき、生活を高めていける力のある子供を育てるための教育」を基本目標として掲げ「一人の百歩より、百人の一步」を合言葉として取り組まれた。

この「共同研究」の発足は、

- 学校自体の研究、教育委員会系統の研究、組合系統の研究と、各系統の研究が入りくみ、その結果、学校や教師に混乱と負担がかかっていたこと。
- そのことが一貫した研究を阻害し、精神を分散していたこと。
- 現場研究の複線化に伴って特定のエキスパートに研究が集中する傾向がでてきたこと。

といった当時の戦後の混乱状況の下で、一人の教師が独力で教育計画を樹立することは至難であったため「石狩は石狩の立場で総力を結集して、石狩の場に即した教育の計画を立てなければならない」との考え方が土台となって、現場研究の一元的組織化と、共通な問題意識の確立が強調され、その後11年間にわたって「共研」活動が続けられた。

この「共研」時代の成果は実に大きなものがあり、「石狩は石狩の立場で総力を結集し、石狩の場に即した教育の研究を」という精神は現在もそのまま受け継がれている。しかし、

- 研究の一元化を目指した研究ではあったが、教師の主体性や指導力の質的変革という面で期待通りの成果が得られなかったこと。
- 石狩教育研究所の公的機関への移行が余儀なくされたこと。
- ILO条約批准に伴う校長、教頭の組合離脱により、従来の管内全員参加による研究体制が組めなくなったこと。

など、その後の教育をめぐる諸情勢の変化と研究活動の反省により、「共研」体制による研究方式の抜本的改善が迫られ、その結果として昭和41年度において石狩管内教育研究会、略称「石教研」が誕生した。そして、次の4点を基本態度とおさえ、本年度まで研究が推進されている。

- 教育研究は、本来現場実践を基盤とし、それぞれの実態に即して自由に、しかも自主的に行われるものである。
- 教育研究は、教師一人一人が日常の教育実践を通じて主体的に行うべきものであるが、単に個人的内容にとどまったのでは望ましい成果を期待することはできない。組織化された研究体制の中で、相互の課題意識の共通化を図って研究を進めることによって最大の成果を生み出すことができるものである。
- 教育研究の効率を高めるためには、管内の教育機関や研究団体が体制的にも内容的にも一元化を志向し、研究に取り組む教職員のエネルギーの集中化を図らねばならない。
- 教育研究の内容は、各学校の研究課題の解明及び体制の確立と教職員一人一人の指導力の向上を図ることをねらいとするものでなければならない。

## 2. 研究内容

石教研の基本目標である「主体的・創造的で人間性豊かな子どもを育てる教育の確立」を受け、昭和45年から2ヵ年を単位として研究を推進してきた。

- 第1次 「教材の精選構造化」
- 第2次 「学習過程」「体育領域の学習」「学習訓練の具体的方法」「A V機器の活用」  
途中省略 第14次より小中分離開催
- 第15次 (1998～1999年度)
  - 小学校  
「楽しさや喜びを味わわせる指導のあり方」  
「新しい学力観に基づく評価・評定のあり方」  
「保健の学習指導」
  - 中学校  
「新しい指導技術(指導と支援)と学習環境(学習資料・学習の場)の交流」  
「体系的・科学的思考に基づく保健学習の取り組み」
- 第16次 (2000～2001年度)
  - 小学校  
「指導過程の工夫」  
「支援と評価の工夫」  
「保健学習の工夫」
  - 中学校  
「領域内選択学習と新しい指導技術(T T、支援、生徒の組織化、生徒の動かし方など)の取り組み」

「体系的・科学的思考に基づく保健学習の取り組みと心の健康」

「年間授業時数削減にかかわる教材の精選と基礎基本の内容の取り組み」

・第17次（2002～2003年度）

○ 小学校

「子どもたちが生き生きと取り組める学習過程の工夫」

「子どもたち一人ひとりに自信と意欲を持たせる支援と評価の工夫」

○ 中学校

「教材分析の深化(生徒の実態を捉え運動の特性を押さえた教材・教具・ルールなどの工夫と心と身体の一体化を目指した保健学習)」

「選択制授業の取り組み」「評価のあり方」

・第18次（2004～2005年度）

○ 小学校

「子どもたちに、できることの喜びを実感させる学習過程の工夫」

「子どもたち一人ひとりの実態に応じた指導方法の工夫」

「実践的な態度を育てる保健学習の工夫」

○ 中学校

「学習過程の工夫と個を伸ばす選択制授業の取り組み」

「評価のあり方」

・第19次（2006～2007年度）

○ 小学校

「子どもたちの気づきを引き出す学習過程の工夫」

「子どもたち一人ひとりの実態に応じた指導方法の工夫」

「実践的な態度を育てる保健学習の工夫」

○ 中学校

「学び方を重視した選択制授業の取り組み」

「仲間とのかかわりを重視し、生徒の意欲を高める《課題学習》の取り組み」

「生徒の《具体的な学びの姿》を明確にした評価のあり方」

・第20次（2008～2009年度）

○ 小学校

「気づきや喜びを共感できる学習過程の工夫」

「子どもの実態をとらえ、個に応じた指導方法の工夫」

「実生活とのつながりを大切にした保健学習の工夫」

○ 中学校

「できた」「わかった」と実感できる授業の工夫

「生徒の《具体的な学びの姿》を明確にした評価のあり方」

### 3. 成果と課題

石教研保健体育部会として、今まで様々な研究に取り組んできた。

毎年10月に管内全教職員で研究会を開催し、公開授業を中心に、今の保健体育科のあり方、今後の方向を検討してきている。

また、理論実技研修会を別日程で開催し、部会員の興味・関心が高い内容を実施してきている。

近年、授業時数の確保の影響もあり、理論研修会、実技研修会の2本立ての研修会が、どちらか一方の開催になるなど、研究に関わる時間は年々少なくなってきているのが事実である。

管内の保健体育科教員全員でこのような機会を持ち、子どもたちの実態に合わせた指導実践を行うための研究を今後も続けていく。

部会員の増加と小学校・中学校との専門性、授業内容の違いなどから小・中分離開催をしている。しかしながら、近年の子どもたちの体力低下など深刻な問題もあり、小中での交流を活発にし、連携をはかりながら研究を続けていくことも必要であることは間違いない。役員レベルでの交流・連携は分離後も続いているが、会員レベルでの交流・連携も視野に入れた運営を今後一層進めていくことが必要と考えている。

### 4. 役員・事務局員名簿

#### □ 小学校部会

部長	内田 拓志	(いずみ野小)
副部長	久恒 重尚	(日の出小)
事務局長	石村 正仁	(紅葉山小)
事務局次長	東 陽三	(江別二小)
研究員	安部 由里香	(中央小)
教育課程代表	伊藤 順之	(江別二小)

#### □ 中学校部会

部長	永井 利博	(樽川中)
副部長	野々川 雅貴	(大曲中)
事務局長	競 達也	(富丘中)
事務局次長	千葉 大光	(花川中)
研究員	細田 幸男	(中央中)
教育課程代表	高橋 真吾	(江陽中)